

(始良郡始良町船津180-3)

位置と環境

瓦窯跡は、別府川河口から約5km上流の位置にあり、標高15~18mの小丘陵上に立地している。北側約300mの地点には、南流してきた別府川が東方に大きく蛇行する屈曲部があり、この付近に船着場施設の存在を想定すると、焼成された瓦は舟を使って国分市所在の大隅国分寺まで輸送された可能性がある。

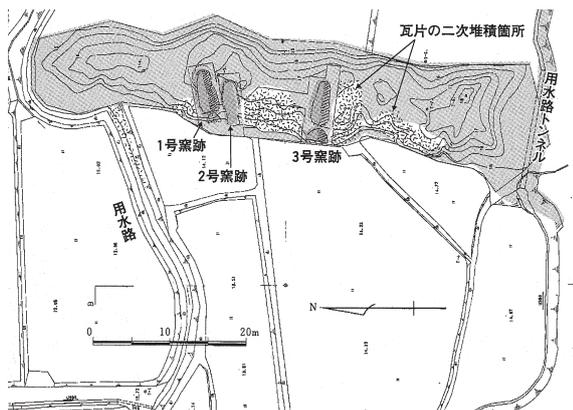
調査の経緯

昭和45年に実施された九州縦貫自動車道建設工事に伴う事前分布調査の際に確認され、出土する布目瓦から大隅国分寺との関連性が指摘されてきた。

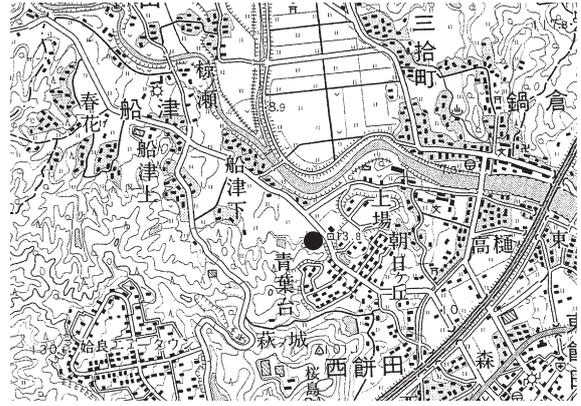
その後、瓦窯跡周辺の開発に先行する形で、平成8年より始良町教育委員会が発掘調査を実施した。

遺構と遺物

調査の結果、瓦窯跡は3基確認された(第2図)。窯は小丘陵の西側斜面に、小宮路凝灰岩部層(鍋倉火砕流堆積物)を削りぬいて築かれている。丘陵東側斜面には窯跡は確認できない点や、この地点では風が西側から吹くことを考慮すると、焼成時の風向きを計算に入れた築窯であったことが考えられる。また、現状では窯跡の窯尻部分が地表に露出した状況になっているが、小丘陵南方にある地山露出面との地層の連続性から、築窯時の小丘陵最高位は現状より1m以上高かったと推測される。したがって、瓦窯跡はすべて地下式登窯であると推定した。以下、



第2図 宮田ヶ岡瓦窯跡遺構配置図〔1：1000〕



第1図 宮田ヶ岡瓦窯跡の位置

各窯跡について、概要を記述したい。

A. 第1号窯跡

第1号窯跡は丘陵の最北に位置し、第2号窯跡と近接して検出された。残存長5.8m、床面最大幅1.7m、焚口と窯尻の比高差2.22mを測る。遺存状態が良くなく、焼成部(室)の天井壁や側壁はほとんど残存しない。

B. 第2号窯跡

第2号窯跡は全長4.5m、幅1.1m(焚口)・1.2m(焼成部)・0.9m(窯尻)、焚口と窯尻の比高差1.68mを測る。第2号窯跡は崩落した天井壁が完全に遺存しており、覆土除去のみに調査を留めたため、内部構造は不明である。

C. 第3号窯跡(第4図)

第3号窯跡は最も遺存状態がよく、窯内部の北半分を調査した。その結果、第3号窯跡は地下式無階無段登窯で、全長6.34m、床面幅は焚口で2.14m、焼成部で1.2m(推定)、窯尻で0.9mを測り、焚口から窯尻までの比高差は2.16m、床面勾配は約36度である。焚口の奥行きは残存長で1.46m、天井高は0.66mを測る。

特徴的な遺構として、焼成部床面に丸瓦・平瓦を分割・再利用した計9段の段を設けており、各段の段差は平均13.7cm、奥行きは平均34.8cmである。そして、この段の上に窯詰め状態の瓦群が3箇所遺存していた。そのうち1箇所は窯詰め状態のセットが完全に残っており、丸瓦1枚を平瓦3枚と2枚で合掌形に包み込む形で検出されている。この窯詰め状態の瓦を基礎に想定復元した1回当たりの生産数量

は、1段積みの場合、平瓦128枚・丸瓦16枚の計144枚、2段積みの場合、平瓦256枚・丸瓦32枚の計288枚である。

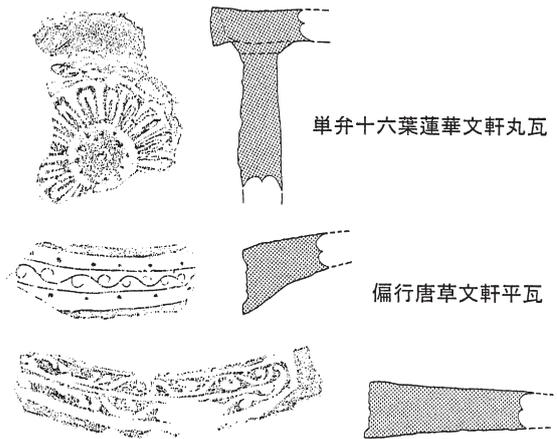
この第3号窯からは土器は出土せず、瓦のみが焼成された瓦専用窯であるが、廃瓦を用いた段を取り除くと、その平面形や構造に須恵器窯との類似性が認められる。遺物の大半は瓦であり（第5図）、総点数は2万点に近い。以下、瓦の種類ごとに記述する。

A. 軒先瓦（第3図）

瓦窯跡からの軒先瓦の出土量は極めて少なく、軒丸瓦3点、軒平瓦21点を数えるのみで、いずれも破片資料である。瓦当文様は軒丸瓦が単弁十六葉蓮華文、軒平瓦には2種類の偏行唐草文がみられる。軒平瓦の2種類は大隅国分寺跡で同範と思われるものが出土しているが、軒丸瓦はまだ確認されていない。

B. 丸瓦・平瓦

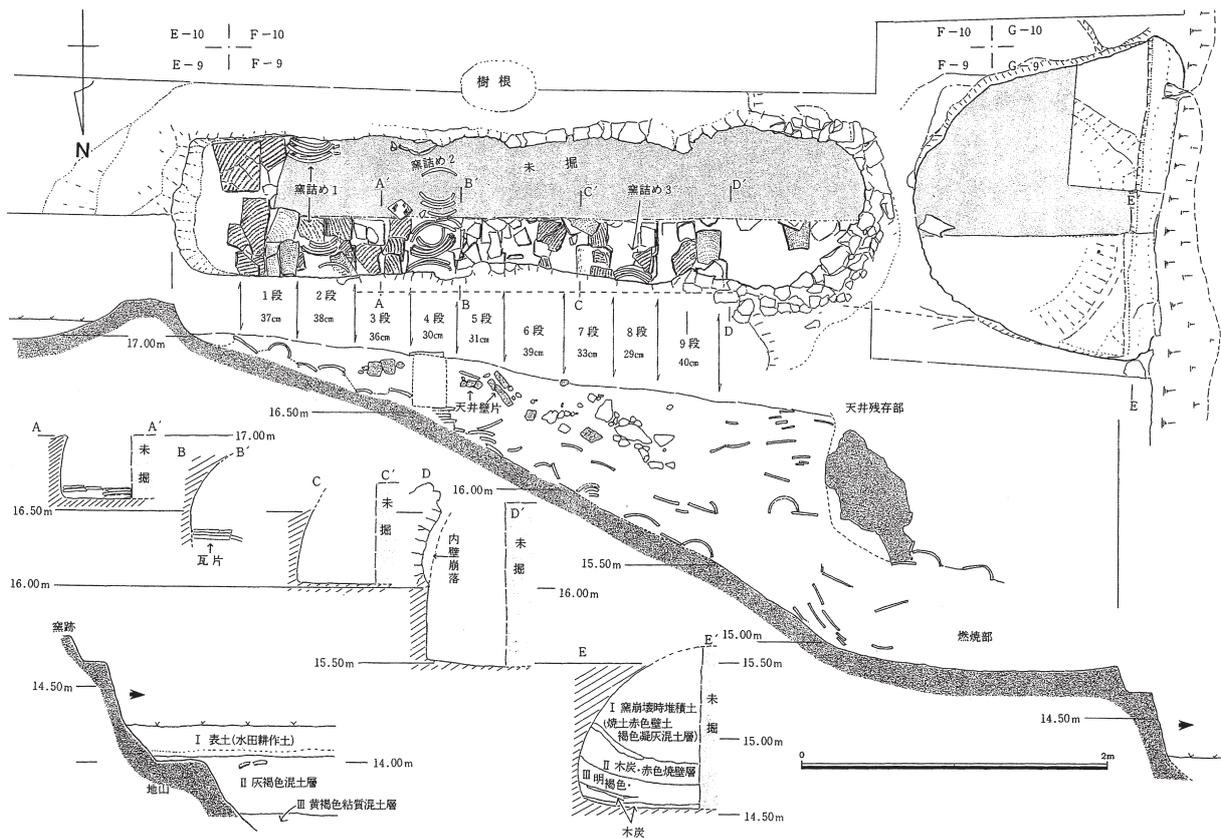
瓦の種類別の割合は丸瓦3割、平瓦6割、その他（軒先瓦・道具瓦）1割である。丸瓦・平瓦は形状・成形技法の点での分類が可能である。丸瓦はまず形



第3図 宮田ヶ岡瓦窯跡出土の軒先瓦〔1：5〕

状から、行基式（無段式）と玉縁式（有段式）の2種に大別できた。さらに行基式・玉縁式ともに成形・調整技法から2種類に分類でき、行基式I類・II類、玉縁式I類・II類と呼称している。

平瓦は最も出土量が多く、破片資料が大半を占めるが、資料整理の結果、宮田ヶ岡瓦窯跡の平瓦には、「桶巻作り」「一枚作り」の両者が確認できた。さらに「桶巻作り」のなかには、「粘土紐巻きつけ」の



第4図 宮田ヶ岡第3号窯跡平面図・断面図〔1：5〕

資料と「粘土板巻きつけ」の資料がみられ、結果的に成形技法としては「粘土紐桶巻作り」「粘土板桶巻作り」「一枚作り」の3種が存在することが判明した。

C. その他の遺物

熨斗瓦は大棟や降り棟を高く積み上げるのに用いる瓦である。面戸瓦は、丸瓦・平瓦を葺き上げた時、大棟や降り棟の下に生じる平瓦の凹面との間を塞ぐための瓦であり、5点出土している。

埴は10点出土している。基壇の構築材として寺院に供給された製品と考えられる。土馬も1点出土している。

特徴

本瓦窯跡は国分市大隅国分寺の瓦を焼成した窯である。また、瓦が窯詰め状態で検出されており、当時の操業の様子をうかがうことができる。平成16年9月30日に国史跡大隅国分寺跡附宮田ヶ岡瓦窯跡として追加指定された。

資料の所在

出土遺物は、始良町歴史民俗資料館に保管・展示されている。

参考文献

始良町教育委員会1999「宮田ヶ岡瓦窯跡」『始良町埋蔵文化財発掘調査報告書』第7集

(深野信之)



第5図 宮田ヶ岡瓦窯跡出土遺物〔1:10, 埴=1:8, 土馬=1:4〕